

CONTENTS

レンタル彼氏と友達料金で 中出しセックスする方法

含まれる要素

カントボーイ
モブ責め
中出し
クリイキ
乳首責め
玩具責め
言葉責め

※サンプルはエロパートのみ

月白と再会してから、夜風は毎晩、月白を思って自慰をした。その手の玩具を使って、月白に責められる妄想をしながら自分を慰める。月白が自分を見て勃起するさまも、ましてや挿入するイメージもできなかったから、ローターをクリトリスに押し付けて何度もイって快感に浸った。後でむなしくなるのに、やめられなかった。

「……時間だ、」

何回目かの絶頂の後、夜風はシャワーを浴びてから、家を出た。月白の家のインターホンを鳴らすと、まぶしい笑顔が自分を出迎えた。

「あれ？　どうしたの？」

「え……？」

「なんか、ぼーっとしてるから」

部屋のテレビにはバラエティ番組が流れている。夜風はテレビを消してから、意を決して、ベッドに座った。

「月白、」

「……どうしたの？」

「その……もう、お金もらうの、いやで……」

しどろもどろにそう言うと、月白は少しだけ首を傾げて、それから笑った。

「でも君、前の彼氏にお金全部持ち逃げされて困ってるんでしょ？ 被害届出すのが可哀想だからってそのままでさ……」

「え、なんで知って……」

「急に大学を休学して、心配で……ほら、君に彼氏ができる前はよく遊んでた仲だし、ちょっと調べちゃったんだ。頼ってくれたらいいのに、全然連絡こないし」

だってとっかえひっかえ彼女がいたじゃないか、とは言えなかった。

「僕はそんな自己犠牲精神が強い、美しい心をもった君を助けたいんだ」

どこまでもよどみない、澄んだ声で、月白がそう言った。自分の思考を奪う声だ。

好きだった。好きだったのだ、月白のことが。

「でも、それでも、もう少し、その……」

「……ん？」

「だから！ その……何かしてもいいってことだよ、ていうか、してほしい、こんなの、……」

言い切ってしまうてから、夜風は自分の顔が燃

えるように熱くなるのを感じた。なんて浅ましいんだろう、自分は。

「なにかって、具体的には？」

「……わかってんだろ」

「うーん……本当にわかんない。夜風くん、何が言いたいのか？」

月白は本気でわからないという顔をしていた。とぼけているのは一目瞭然だった。自分がはっきり言葉にしないと話が進まない。だからもう、引き返せなかった。

「……セックス、とか……そういう、ことしないのかって、」

言った瞬間、部屋の空気が変わった。月白が目をはなれ、息を詰めていると、月白が隣に座ってきた。ぎしりと鳴るスプリングが、気持ちを煽る。

「……………夜風くんは、したいのか？」

「お、俺は、あのとき、お前が金を積んできたから……てっきり……そういうことすんのかと思って……」

「へえ。つまり君は、僕に襲われる覚悟で、部屋に来たんだ？」

あけすけな言い方で返される。けれど実際、そ

うだ。何週間も、心のどこかで、いつか何か起きることを期待していた。なんだか泣きそうだ。自分ばかりが、重い。

「……………もうここには来ない。お金は使っていないから、今度振り込、」

言い切る前に、ぐ、と耳元に顔を近づけられて、どきりと心臓が高鳴る。

「今の君の可愛い顔、鏡で見せてやりたい」

「え、」

「ねえ夜風くん。僕とセックスする妄想してオナニーしたことある？ 頭の中で何回僕に犯された？」

「…………っ、や、」

逃げる隙もなく、抱きすくめられた。耳元に吐息がかかって、くすぐったい。

「つきしろ、」

「可愛いね」

「っ、うるさ、」

耳殻を軽く吸われて、夜風の声が詰まった。柔らかく生あたたかい感触に、手先がじんと痺れる。

「っ、月白、…………やめ、」

「僕は考えてたよ？ もし君を押し倒して服を脱

がせたら、どんな反応をするんだろう？ って。
この部屋でゲームしたり、映画をみてるときも、
僕は君を犯す想像をしてた」

「……え？」

「気づかなかった？」

逸らした首筋に、月白の唇が触れた。ちゅ、と
軽い音を立てて吸われる。

「う、……」

うなじから耳の裏にかけて、月白の唇が這う。
柔らかく皮膚を食まれるたび、背筋にぞくりとし
たものが走った。腕の中に閉じ込められたまま、
逃げ場を探して身をよじる。けれど、よじった分
だけ、身体は月白のほうへ寄っていくようだった。
こんな戯れに近い触れ方一つで、身体がどんどん
熱くなる。

「僕は答えたよ。だから夜凪くんも教えて？」

「っ、やだ、」

「強情だなあ……僕、素直な子が好きなんだけど」

困ったように眉を下げる月白のその目は笑って
いない。夜凪が言葉を探しているうちに、顎を掬
い上げられた。

「あ、」

唇が塞がれて、夜風は反射的に肩を強張らせる。逃げようと顔を引いたら、後頭部を掴まれて引き戻された。

「んっ、」

薄く開いた隙間から、舌が入ってくる。歯列をなぞられて、身体の芯が痺れた。息の継ぎ方を忘れて、鼻から抜けるような音が漏れる。それが自分の声だと気づいて、耳まで熱くなった。

月白の手が、シャツの上から胸のあたりを撫でていく。指の腹全体でゆっくりと形を確かめるみたいに乳首をいじられて、夜風は喉を鳴らした。

「ふ、……っん、」

抵抗しようと持ち上げた手は、途中で行き場を失って、月白のシャツを掴んだ。

「夜風くん」

優しい声に、夜風は、口を開いた。

「……服脱がしてから、聞いて、ほしい……」

自分の口から出た言葉とは思えなかった。けれど、確かに自分が言ったのだ。

「はは、うん。わかった」

シャツのボタンを外され、ゆっくりと脱がされる。そうしてベッドに押し倒される。肌に触れる

シートに自分の体温がなじんできて、ドキドキと心臓が跳ねる。

「……実はね、君から言いだしてくれるのを待ってたんだよ」

覆いかぶさってきた月白が、首筋に顔を埋めてきた。

「ほら、デート何回目でセックスするかの答えって、人それぞれじゃない？ 君の心の準備ができるまで、待ちたいと思った。君が誘ってくれて本当にうれしいよ。あ、夜風くんは頑張らなくていいから、安心してね。何かしたいなら、お口は動かしてほしいけど……でも、初めてのセックスで舐めさせるのはさすがにだめかな？」

軽口を叩きながら、胸元をなぞられて、夜風は息を詰めた。そのまま手が下りて、股のあたりをまさぐられる。

「君、絶対処女じゃないもんね？ じゃあいいのかな、優しくしなくても」

「……うん、」

「ねえ、元カレとは、どんなセックスしてたの？」

前の彼氏には優しくされすぎて、逆に緊張して痛みを伴った。傷つけてはいけないという気遣い

が、かえって夜風の身体を強張らせた。

その優しさすら、偽物だった。自分を油断させるための。

「……もっとひどくしてほしいって、思うくらい、普通」

「ひどくって、具体的には？」

「し、しばられたり、玩具とか、つかわれるみたいな、」

言った瞬間、月白がぷっと噴き出した。

「はははっ！ ごめんね？ そういうの家になんだよ」

「……そ、そうだよな」

かあ、と顔が赤くなる。

「うーん、でも……拘束かあ」

月白はしばらく考えたあと、キッチンのほうへ向かった。持ってきたのは、食品用のラップだった。

「縄で縛ると痛いからね。これだと痕つかないし、いいかも」

頭上でひとまとめにされた両手首に、ラップがくるくると巻きつけられていく。強く締め付けているわけじゃないけど、ぴくりとも動かせない。

お腹の奥がきゅうと締まる。

「あとは玩具かぁ……うーん……」

月白が部屋の中を見回して、棚から何かを手にとって、戻ってきた。

手にしていたのは電動洗顔ブラシだった。電源をいれると、ブラシが振動をしはじめる。

「それ、」

「女の子が置いていったままのがあってさ」

笑顔のまま、月白がそう言った。閉じようとした太ももに手を差し入れられる。

「痛かったら言ってね」

「あ、」

洗顔ブラシが下着に押し当てられる。振動が伝わった瞬間、夜風の背中が反った。想像していたよりずっと強い刺激に、拘束された腕が震える。全体をなぞるように動かされて、勝手に腰が動く。

「ふう、……♡……ん、……」

「本当におちんちんないんだね」

「っは、……♡」

「ねえ、これどこあてたらいや？」

「……く、クリトリス、いや♡」

「はは、そっかあ」

「——あッ」

く、と割れ目に押し付けられて、過敏な突起へとダイレクトに高速の振動が伝わる。与えられた刺激は想像を遥かに超えていて、頭の芯へ真っ白な閃光が突き抜ける。腰から下が自分のものでなくなっように跳ねた。頭上で束ねられた手首がラップに食い込んで、身をよじる以外に何もできない。

「あ♡♡♡♡♡ああ♡♡♡」

極細毛のブラシ越しに伝わる細やかな震えが、薄い下着の布地を湿らせながら、休みなく秘肉を刺激して、逃がしようのない熱がそこに籠もっていく。

「うう♡♡♡あっ♡♡まって……♡」

開いた口からは、艶めいた甘い声しか漏れてこない。逃げようと身をよじるものの、ただシーツを擦る音だけが虚しく響いた。

自分の声とは思えなかった。喉の奥で作り替えられたみたいに甘く裏返る。

「本当に待っていいの？」

「……っ、」

そんなの、やだ。そんなことは、もうとっくに

わかっている。喉の奥は、言うべき言葉を探しはじめていた。

「……クリイキ、したい……♡もっとして……♡」

「うん、いい子」

褒める声とともに、ブラシの角度がわずかに下がる。振動が入り口のあたりへ移った瞬間、腹の底が引き攣るように収縮した。求めたものが求めた形で返ってくる。

そのまま滑り上がって、ふたたび突起を捉えられた。今度は焦らしがない。剥き身に近い状態で押し当てられた高速の震えが、逃げ場のない一点へ集中していく。腰の奥から迫り上がるものが、あっという間に限界の縁まで到達した。

「あ、あ、っ、イク、イっちゃ——ッ♡♡♡」

視界が白く飛ぶ。爪先がぴんと伸びきり、拘束された手首がラップを軋ませた。太ももが痙攣して、シーツを蹴る。

それなのに、ブラシは離れなかった。達したばかりの過敏な突起へ、変わらない強さの振動が容赦なく注ぎ込まれる。

「ひ、あゝ♡♡いま、いった、っ♡」

「知ってる。もっとしてって言ったのは君だよ」

「ちが、っ、そうだけどっ、あああ♡♡」

絶頂の余韻が引ききる前に、次の波が押し寄せてきた。休ませてもらえないまま、二度目はさらに短い助走で訪れる。頭の芯が焼き切れるような感覚とともに、腰が跳ね上がった。

「んああああ♡♡♡——ッ！」

喉が反り返って、声が途中で途切れる。息の吸い方を忘れて、ひゅっと鳴った。いくたびに感度だけが積み上がって、快感と苦痛の境目が曖昧になっていく。涙が耳の横を伝い落ちて、枕に染み込んだ。

「まだいけるよね」

月白の声が、遠くで聞こえる。ブラシの角度がまた変わって、突起を押し潰すように擦られた。

「あゝ あゝ あゝ っ♡♡♡む、りっ、むりい♡♡」

「腰浮かせてあててるの君だよ？」

「ああああ♡♡♡うう♡ああ♡」

月白は楽しそうに目を細め、ひときわ声をあげる場所を攻め続ける。直接擦りつけられるような強い振動が、夜風の思考を容赦なく白く塗りつぶしていく。広範囲の神経を一気に揺さぶる独特の圧迫感に、お腹の奥がきゅうと絞られるような快

感が絶え間なく押し寄せる。

「気持ちいいね？」

「あ、ひっ……♡♡んう……っ♡」

「声我慢しなくていいよ？」

逃げ場のない快楽に、夜風の爪先がピーンと伸びきる。あまりの苛烈さに涙を浮かべながら、夜風は与えられる快感に身を狂わせていった。

「あ、あ、つつきしろ……っ」

「うん？」

「イク、っ、またイっちゃう……っ♡♡」

「いいよ、イって」

その一言と同時に、ぐ、とクリトリスにまた強く押し当てられる。

「あああッ——♡♡♡」

息が荒く上がって、視界が滲む。全身を大きく跳ねさせながら、絶頂に呑み込まれていく。だけど月白の手は緩まない。達したばかりの過敏な粘膜へ、容赦なく振動を与えつづけていく。

「もうやだ、はなしてっ♡」

「まだ余裕そうだから」

「あああ♡♡ひぁッ、だめッ……♡♡」

絶頂の余波に晒された突起が悲鳴を上げる。狂

おいしいほどの強烈さに、夜風はプライドも何もかも捨てて大声を張り上げた。

「ッ……あああ——ッ!!」

「クリイキ気持ちいいね？」

「もう、きついい♡♡やだあ♡ とめてっ、おかしくなっちゃう♡♡」

「おかしくなっているよ。僕しか見てないし」

「っあ、……っひ♡♡ああッ♡♡♡」

逃げ場のない快楽が極限まで昂ぶり、下腹部がきゅうと引き攣るように収縮する。過剰な刺激に限界を迎えた内側から、ビシャ、と音を立てて愛液が勢いよく噴き出した。下着とシーツを湿らせながら何度も跳ね起きる下腹部に、ブラシをこすこすとなぞっていく。

「はっ♡♡うう♡♡く……ッ♡ああ……っ」

静まり返った部屋に夜風の荒い呼吸音だけが虚しく響く。夜風は指先までガクガクと震わせたまま、力なくシーツへ倒れ込んだ。